**イサベル(4)**

**第２７章**

**新規登場人物**

カルロス８世(1470-1498)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjjwqWC_KHXAhXBmBoKHTKqDQ0QjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/fernando-el-catolico/t3&psig=AOvVaw3b6kvDQUvp7s9ARt33Wh0X&ust=1509783509251681)

１３歳でフランス王位に就き１４９３年カスチィ―ジャアラゴンと不可侵協定を結びナポリ王国を占領ローマ法皇庁や隣国が反抗し反フランス連合が結成されフェルナンド王によってナポリから追放される。

フエンサリーダ(1450-1535)



カトリック両王の大使として神聖ローマ皇帝やイングランドとの外交担当重臣。

フランシスコシスネロス(1436-1517)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwji3NqYoaLXAhXDuBoKHVIpBOkQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/francisco-jimenez-de-cisneros-t3&psig=AOvVaw3asF9vHdqPAY4zpVubk5R7&ust=1509793489627086)

質素な修道士からイサベル女王の聴罪司教となりその後グラナダ大司教やペドロゴンサーレスの後を継ぎ枢機卿となりトレド大司教も兼任しカトリック両王の最も信頼できる相談役としてスペイン王国の政治の舞台で活躍する。フェルナンド王がナポリ王国に滞在中摂生として王政を務めフェルナンド王が亡くなった後カルロス王がスペインに来るまでの間摂生として王国を統治した。また有名はアルカラ大学を１４９９年に設立した。

**場所**

メデイーナデルカンポ



モタ城やｲｻﾍﾞﾙ女王が亡くなった街として有名。当時ヨーロッパ有数の商業都市で為替手形発祥の地。

バルセロナ

カタルーニャ侯国の首都バルセロナでは１４９２年カトリック両王が新大陸航海から戻ったコロンブルの出迎えやフランス王使節との和平会議が開かれた。

**要約**

１４９２年１０月１２日コロンブスが西インド諸島サンサルバドール島に着く。ｲｻﾍﾞﾙとフェルナンドはグラナダを後にしてフランス王使節を迎え和平会議に臨む為バルセロナに移動し長期間にわたって不在にしていたカタルーニャで侯国の統治者や住民との対話し滞在する目的であった。フランスとの不可侵協定はバルセロナ条約とも呼ばれフェルナンド王の外交面での賢さが証明さる。フランスはアラゴン王国の領土であるロセジョンとセルデーニャを返還する代わりにアラゴンがイタリア半島に介入しないことを約束させることが主な内容だった。フェルナンド王は自分の従弟がナポリ王だったので将来はアラゴン王がナポリ王国を相続する権利ありと考えていたが武力行使での相続ではなく国際紛争を利用することを思案する。バルセロナ条約ではアラゴンはフランスのイタリア侵攻に対して介入できないが例外としてローマ法皇庁が危険にさらされた場合はこの条項は適用されないと補遺を入れる。案の定フランスはローマ法皇庁を脅かしナポリ王国を占領するとローマ法皇は神聖同盟を組んでフランスをナポリ王国から追放するようフェルナンド王に助けを求めてくる。この機会を待っていたフェルナンド王はフランスがバルセロナ条約を破ったとしてアラゴンがフランスを攻撃するのではなくローマ法皇を助けることを理由にナポリ王国に軍隊を送り込むことの正当性を主張する。司令官にゴンサーロフェルナンデスを任命しグラナダ戦争で鍛え挙げた戦争体験豊富な兵隊を率いヨーロッパ最強と言われていたフランス軍を負かしイタリア半島からフランスは撤退しナポリ王国はアラゴン管理下に入る。当初ｲｻﾍﾞﾙ女王はこの条約に反対だったが結果としてフェルナンド王の賢い行動で国際紛争を巻き起こしフランスが唯一の悪者となりナポリ王国からフランスを追放できたとしてフェルナンド王の軍事外交政策を認める。またバルセロナ条約ではカトリック両王の子孫はフランス王の承諾なしに国際結婚できない条項があったがフランスが条約を破ったので条項は無効となり神聖ローマ皇帝の子息とカトリック両王長男次女との二重結婚を取決め更にイングランド王子との婚約と併せフランスを孤立させることに成功する。コロンブスは航海の帰りに嵐で遭難しポルトガルに漂着する。ポルトガル王に会い西に航海してアジアに到達したことを知らせ自分の考えた正しかったことを伝える。ポルトガル王はコロンブスを優遇し親切にもてなし西ルートの航路をポルトガルに紹介すれば航海王国ポルトガルは東ルートと西ルートでアジアとの交易が独占できるのでコロンブスに対し好条件で優遇すのでポルトガルに残りカスチィージャには戻らないように説得する。コロンブスと同行したピンソン航海士が別ルートでガリシアに着いたとの知らせが入りコロンブスはピンソンがｲｻﾍﾞﾙ女王に報告に出向く前に自分が報告に行かねばならないと悟りポルトガル王に戻る約束をしてバルセロナに向かう。ポルトガルから未亡人として帰ったｲｻﾍﾞﾙ王女は悲しみに暮れる毎日で生涯修道女になると決意するが両親に強く反対される。カブレラはカトリック両王が安全に滞在できるようバルセロナに先立ち防犯警備体制の準備を整える。グラナダ大司教となったタラベラはイスラム教徒の宣教活動で住民の自由を尊重しながらの活動で成果が上がらず関係者含めフェルナンド王も不満を表明していた。ｲｻﾍﾞﾙ女王はタラベラがグラナダ大司教になったので聴罪司教を新たに見つけることを枢機卿ペドロゴンサーレスに依頼すると適当な聖職者で修道士のフランシスコシスネロスを紹介する。若い時カリージョに反抗して投獄された程頑固は性格で政治や権力に一切興味を示さず修道院生活で生涯を過ごすことを決めていたので最初枢機卿の話は断ったがｲｻﾍﾞﾙ女王の要請であるとして宮廷を訪問する。ｲｻﾍﾞﾙ女王はシスネロスの人格が聴罪司祭として理想的であることが分かりシスネロスは宮廷に入ることになる。バルセロナでは宮廷前で大衆が集まっている場所でフェルナンド王が襲われ首を切られ瀕死の重傷を負い命が危ぶまれる。最悪の場合に備えてフアン王子をバルセロナから遠ざける事を決めｲｻﾍﾞﾙ女王はバルセロナの治安を厳重にするよう指揮を取る。幸いフェルナンド王は回復に向かいバルセロナに着いたフランス王の使節と和平協定が調印される。その後コロンブスがポルトガルからバルセロナに現れ新大陸から持ち帰った土産ものを披露する。ｲｻﾍﾞﾙ女王はコロンブスに対し忠誠を誓わせコロンブスもｲｻﾍﾞﾙ女王の為に仕えることを約束しポルトガルには戻らない。

**第２８章**

**要約**

ポルトガルはコロンブスが発見した領土はポルトガルに属するとして要求しローマ法皇もこれを認める姿勢をとる。フエンサリーダがロー法皇に会見しコロンブスの航海はカスチィージャの名義で成し遂げた事業でありポルトガルの要求は論外だと説明すする。フランスが北イタリアに侵入しナポリ王国を占領する意図を見せる。ローマ法皇はカスチィージャよりの説明で大西洋はカスチィージャの領海であることの確認を勅書を発布するが見返りに自分の私生児フアンとカスチィージャ王家の淑女を結婚させることを条件にだす。シスネロスが修道院内の戒律が守られていないことがｲｻﾍﾞﾙ女王が自身に対してとる厳しい姿勢と比べ矛盾しているとして枢機卿ペドロゴンサーレスに指摘し修道院内部を一度検査すべきだとの考えを出し枢機卿の許可得てｲｻﾍﾞﾙ女王に相談し修道士たちの悪い習慣を是正すべきと進言するがｲｻﾍﾞﾙ女王は教会より抗議されない程度で調査を進めることを許可する。シスネロスはバジャドリッドの修道院を訪問するが事前に連絡しなかったとして門前払いされ修道院内に入れず宮廷にもどりｲｻﾍﾞﾙ女王より叱りを受けフランシスカノ派が王家が修道院の内部事情を調査しているとして抗議されては困るとし余計な行動はとらないように命ずる。コロンブスは二度目の航海に出ることが決まり準備を始めるがポルトガル王と裏で約束をしているのではないかとフェルナンド王に疑われ心配になりｲｻﾍﾞﾙ女王と心を打ち明けて話し合いカスチィージャがローマ法皇からの勅書で大西洋の領海権を認められポルトガルには何の権利がない事を明らかにしコロンブスもｲｻﾍﾞﾙ女王の下で航海に出ることを再度確認する。その後フエンサリーダがポルトガルを訪問しローマ法皇の勅書でポルトガルには大西洋領海権がないことを伝えるとポルトガルはカスチィージャから出港する船団はポルトガル海軍が攻撃し太西洋に航海できなくする意向を伝える。これを受けてｲｻﾍﾞﾙ女王はトルデシージャでポルトガル王と会談しお互い親戚関係にある間柄なので話し合いして合意に達する為の交渉を提案する。カスチィージャはポルトガルに対しカボベルデより１００レグアまでの海域を与えると譲るがポルトガルは２５０レグアでなければ受けないと主張し交渉は中断する。結局２５０レグアは受けるが北アフリカのメリージャはカスチィージャが所有するとフェルナンド王が条件を付けると会議は再び中断し最終的にポルトガルは３７０レグアを要求しｲｻﾍﾞﾙ女王がこれを受け合意に達し１４９４年６月７日トルデシージャス条約が結ばれる。フランス王はカスチィージャとポルトガルが世界を分け合う条約を取り交わしたことに不満を示しナポリ王国占領のためまずローマ法皇庁を攻め法皇を脅かしナポリ王として認めさせるとして意気込むと寵臣がその様な行動をとれば国際社会の反対を受けフランスにとって不利になると助言するが王は聞かずローマに向かって進行する。これを知った法皇はフェルナンドに書状を送り急遽軍隊を送りローマ法皇庁を守る様に要請する。この書状を入手したフェルナンドはまだ時期が来るまで待つことを重臣に言い渡しローマ法皇庁がフランスによって占領される直前まで援軍を送らずに時間を稼ぐ。その後フエンサリーダを法皇庁に派遣しフェルナンド王は約束通りシシリア駐屯の海軍やアリカンテやカルタヘーナから船団が既にイタリア半島に向かって航海中であることを伝え大西洋の領海権はカスチィージャにありポルトガルには権利ないことを確認する勅書を無条件で出さなければ軍事援助はできないと迫りカスチィージャ王家の子女との結婚の代わりにフェルナンド王の従妹を婚約者として預ける。法皇はこれを嫌々ながら受ける。ｲｻﾍﾞﾙ女王はコロンブスの２回目の航海にあたり貧しく極めて質素は修道士を同乗させることを決めカデイス港から１５００人の乗り組員を乗せ出航する。ｲｻﾍﾞﾙ女王がトルデシージャスでポルトガルとの交渉中シスネロスはカブレラの力を借り再度修道院を訪問カスチィジャ王の命令で院内に入り公証人を介して修道士達の悪い習慣を現場で突きとめ修道院で娼婦と修道士が同居生活している事実を暴露しｲｻﾍﾞﾙ女王に報告する。

**第２９章**

**新規登場人物**

フアナ王女(1479-1555)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwip9Y2l-aXXAhXBXhoKHYmlDcwQjRwIBw&url=http://ocio.diarioinformacion.com/tv/noticias/nws-405468-la-trama-serie-isabel-continuara-tve-una-tv-movie.html&psig=AOvVaw3_y3qsNAUR-2DOJx5ux-TS&ust=1509920214218624)

カトリック両王の次女で神聖ローマ皇帝の大公王子フェリーペと結婚し後にカスチィージャ女王になるがフェリーぺが亡くなると精神が動揺し狂女王と呼ばれるようになり息子カルロスが王政を治め彼女は生涯トルデシージャスに幽閉される。

フアンフォンセカ(1451-1524)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjfsYnF-aXXAhUDQBoKHaVQB88QjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/pedro-de-castilla&psig=AOvVaw0vFlKFbl8fPiFvCkJY6VeB&ust=1509920277171934)

セビリア大司教アルフォンソフォンセカの甥でバダッホス司教。王立インデイアス諮問会議委員長として新大陸統治の最高責任者。

フェリーペ美公(1478-1506)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwiC_oig_6XXAhVEVxoKHZY3BcgQjRwIBw&url=http://www.rtve.es/alacarta/videos/isabel/isabel-felipe-hermoso-principe-altivo-independiente/2638548/&psig=AOvVaw0Uk3iBOKcGsJJd57EENpIU&ust=1509921791087959)

父神聖ローマ皇帝母ブルゴーニュ公女の長男でフアナ王女と結婚スペイン王を宣言して二カ月半で病死する。

**場所**

グアダラハーラ



マドリッド東に５０キロ離れた場所にあるグアアラハーラ県の首都でメンドサ家の宮殿がある。

フランデス



現在のベルギーとオランダがフランデスと呼ばれていた。フアナ王女はフェリーペ美公と結婚後この地で生活する。

**要約**

２回目の航海でコロンブスに同行した修道士がカスチィージャに戻りコロンブスが横暴な統治で先住民インデイオスだけでなくスペイン人の役人にも非人道的な強制労働をさせこれに従わない住民はありとあらゆる残酷な仕打ちを受け虐待されていることを報告しｲｻﾍﾞﾙ女王とフェルナンド王は新たな問題に直面する。フランス王は軍隊をローマに侵入させ法皇に謁見しナポリ王のタイトルを与える様に迫り脅迫する。グアダラハーラのメンドサ家の宮殿では枢機卿でトレド大司教のペドロゴンサーレスが病気で亡くなる前にｲｻﾍﾞﾙ女王に自分の後継者は家族でないシスネロスにするとの遺言を残す。ｲｻﾍﾞﾙ女王はシスネロスをトレド大司教に任命するが本人は拒否し宮廷から姿を消してしまう。発見されたインデイアスの領土を管理し統治する為にインデイアス諮問会議を設立しバダッホス司教のフォンセカを最高責任者に任命する。シスネロスは無理やりトレド大司教の座に就かされ宣誓式が挙げられる。ｲｻﾍﾞﾙ女王はシスネロスが教会の悪い習慣を是正し改革を履行するにはトレド大司教の権限で可能になると説得する。シスネロスは修道士の質素な生活が懐かしく悩みながらも大司教の職を自分なりのやり方でスタートする。フェルナンド王はナポリ王国に送ったゴンサーロフェルナンデスの兵力がフランス軍に比較して極めて弱小で直接戦闘が始まれば敗戦することが明らかでありナポリ王国がフランス領になればアラゴンの地中海の覇権は失われるとして何とかしてフランスを追い出すための戦略を思案する。ｲｻﾍﾞﾙ女王にカステイージャがフランスに宣戦布告することを要請しまたフランスを取り巻く主要国である神聖ローマ帝国とイングランドとの同盟を結ぶために婚約外交で子息を各国の王子と婚約されるとしてｲｻﾍﾞﾙ女王の了解を取る。また背後にあるポルトガルとも同盟を結ぶ必要ありポルトガル王家との婚約を決める必要を認める。ｲｻﾍﾞﾙ女王は娘フアナを呼び王家に生まれたことで王国の為に個人を犠牲にする運命にあることを説明し心の準備をさせる。ナポリから使者が来てナポリ近郊のセミナーラがフランス軍によって占領されゴンサーロは兵を撤退させたとの連絡が来る。フェルナンド王はこの撤退を批判しゴンサーロは軍人として落第だとしてナポリから戻る様に命令を出すがｲｻﾍﾞﾙ女王がもう少し様子を見て待つ様にと反対する。フエンサリーダがフランデスでマキシミリアン皇帝の寵臣と大公王子フェリーペと会談しカスチィージャとアラゴンとの同盟を結ぶためにフアナ王女とフアン王子をフェリーペ大公とマラガリータ大公女との二重結婚させることを申しでる。フェリーペ大公は慎重に検討した結果この申し出を受けると回答する。フエンサリーダはイングランドも訪問しカトリック両王の末っ子娘のカタリーナ王女とイングランド王子の結婚を申し出これも受け入れられる。ナポリよりの使者が来てゴンサーロフェルナンデスがフランス軍を破た知らせが入るとフェルナンド王もｲｻﾍﾞﾙ女王もホット一息つく。フェルナンド王は直ちに戦略的にナバーラを攻めフランス軍を動揺させイタリア半島から撤退するまで徹底的に交戦することを命じる。一方西インド諸島エスパニョーラにフアンデアグアドを派遣しコロンブスの行動を調査させる。また懸案になっていたインデイオスが寒い冬に耐えられないので一時カナリア諸島に送り時期をみて新大陸に送り戻すことに決めたとフォンセカが報告しｲｻﾍﾞﾙ女王は安心するが実際にはフォンセカが自分の権限を利用して奴隷の売り買い業者に内緒でインデイオスを売り飛ばしていた。

**第３０章**

**新規登場人物**

マヌエル１世(1469-1521)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwji_Y6RpKjXAhWJHxoKHT14BMoQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/pedro-de-castilla&psig=AOvVaw0-FSTorxik2DhbHnh9xw5k&ust=1510000441674821)

ベアトリスブラガンサ王女の息子でフアン王の死後ポルトガル王になる。カトリック両王の長女で未亡人のｲｻﾍﾞﾙ王女と結婚するが王女が亡くなると妹のマリアと再婚更にマリアも亡くなり３度目もカトッリック両王の孫でカルロス皇帝の姉レオノールと再婚する。

イサベルデアラゴン(1470-1498)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjti7GBrajXAhVGChoKHSkMCskQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/aldonza-de-ivorra&psig=AOvVaw2GSO3O7O-sOlEhN2IhtvoH&ust=1510002817783254)

カトリック両王の長女でポルトガル王子アルフォンソと結婚するが王子が事故で亡くなりカスチィージャに戻が後に両親に強制されポルトガル王マヌエル１世と再婚する。長男ミゲルが難産で生まれるが本人は出血多量で亡くなる。

マラガリータデアウストリア(1480-1530)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjh5pXPpqjXAhXGDxoKHR-aDsgQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/carlos-viii&psig=AOvVaw1bdRdvSv-uv9NrF5DzeBjh&ust=1510001098161040)

フェリーペ美公の妹でカトリック両王の長男フアン王子と結婚するが結婚して間もなく王子が亡くなり未亡人としてフランデスに戻りフェリーペ美公とフアナお王女の長男カルロスの世話人として母親代わりとなり将来オーストリア家の統治者としてブリュッセルでカルロスの摂生を努める。

セサールボルヒア(1475-1507)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwiwpNSxqajXAhXE1BoKHZeODMsQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/fernando-el-catolico/t3&psig=AOvVaw2okgwa20jm6rwfmV-CBlxQ&ust=1510001840261483)

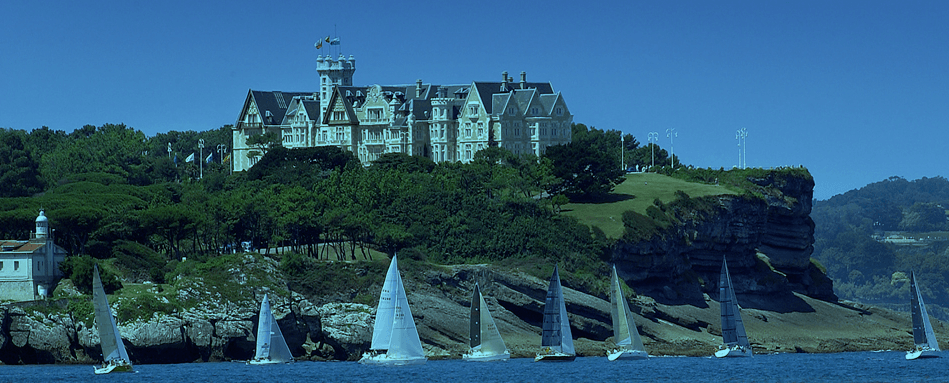
ローマ法皇アレハンドロ６世の長男で１６歳でバレンシア大司教となり１９歳でバチカン総司令官、２０歳で枢機卿となりフランス王国の公爵やパンプローナの司教にもなった。全ては父ローマ法皇の影響力で得た地位であった。

デイエゴコロンブス(1479-1526)

コロンブルの息子で父がカトリック両王との航海に係る協定で保障された権利や財産の相続人となり父を助けて新大陸へ渡る。

**場所**

ラレド

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjslvHSr6jXAhXKAxoKHZbZCc4QjRwIBw&url=http://www.puertodeportivodelaredo.es/&psig=AOvVaw2cgZWb3x2Ztk_5CnPELHb5&ust=1510003340056415)

スペイン北のカンタブリアの小さな港町でここからフアナ王女がフェリーペ美公と結婚の為フランデスに向けて出発した。

**要約**

フランデスより使者として大司教が訪れ両家の子息達の婚約を正式に調印する。フエンサリーダはカトリック両王の使者としてフアナ王女の代理人としてフランデスを訪問し伝統に従って婚約式が行われフェリーペ美公の前で衣服を脱ぎ儀式を済ませる。フエンサリーダはカスチィージャに戻り両王に報告するが一つだけ気になる点は親のマキシミリアーノよりも息子のフェリーペの方がフランドルでは強く父親と反対にフランス支持派であることを示唆する。１４９５年１０月２５日ポルトガルフアン王が従弟のマヌエルを後継者とするよう遺言を残し亡くなる。ナポリ王国でも王フェランテが子孫を残さず亡くなりフランス支持派の叔父であるファドリケが王位に就けば折角フランスを破りフランス軍を追い出したことが水の泡になるとしてフェルアンド王はフエンサリーダをローマに送りナポリ王にはアラゴン王国を相続した正当な後継者としてフェルナンドが継ぐ権利あるとしてファドリケはフェルナンドの叔父アルフォンソ５世の私生児で王になる資格なしと申し渡すが法皇はその場で返事をせず検討するとして態度を明らかにしない。コロンブスがカスチィージャに戻り今までの疑惑解明するが説得力に欠ける。発見した島々では簡単に理屈道理に物事は運ばず時には戦争しなければならない事態も発生すると説明する。ｲｻﾍﾞﾙ女王がコロンブスを監視する組織を作ったことにコロンブスは不満を示すが今になってはコロンブスが居なくても問題なく航海できるので王家に逆らうことは控えた方が良いと助言される。フアナ王女がコロンブスの息子デイエゴと気が合い一緒に乗馬に出かけるようになる。ベアトリスがこれを見て女王に耳打ちしデイエゴは父に強く叱られフアナも母に説教を受ける。ポルトガル王マヌエル１世とカトリック両王の３女マリアの結婚を具体化する為王の母でｲｻﾍﾞﾙ女王の叔母にあたるベアトリスデブラガンサがカスチィージャを訪問する。問題はマヌエル１世はマリア王女の代わりに未亡人でポルトガルから戻っていた長女のｲｻﾍﾞﾙ王女を結婚相手にすることを条件しだしてくる。ｲｻﾍﾞﾙ王女は以前より二度と結婚しない意志が固く女王もこれを尊重していただけに困ってしまう。何度か説得したのちｲｻﾍﾞﾙ王女はポルトガルからユダヤ人を追放することを条件に結婚することを承諾する。フエンサリーダがローマを訪問しフェルナンド王にナポリ王の座を与えるように交渉に行くが法皇はナポリに行って不在であることが分かりファドリケをナポリ王の座に就かせることになったことが判明する。フランス軍がアラゴン領土ロセジョンを攻撃する。フアナ王女がフランデスに向け出発のためラㇾド港に向かう。ｲｻﾍﾞﾙ女王は自分の一番の親友で信頼置けるベアトリスデボアデイージャをフアナに同行させる。それ以外にも数多くの家来がフアナに同行してフランデスに滞在することになる。女王はラㇾドまで見送り最後までフアナから離れず助言を与え励ました。ｲｻﾍﾞﾙ女王がラㇾドから帰る途中でｲｻﾍﾞﾙの母がアレバロで亡くなった知らせがフェルナンド王より直接伝えられる。フアナ王女一行は航路で嵐に遭うが漸くフランデスに到着する。フェリーペ美公に対面の為宮殿の広間で待つがフェリーペは現れず妹のマラガリータ大公女と祖母のマラガリータデヨークが姿を見せフェリーペは用事で不在であることを伝え許しを請う。マラガリータ大公女はフアナ王女と年齢も同じで気が合いまたマラガリータも幼年時代からフランス王と婚約した為フランスで暮らし家族とは生活できなかったことを知り少なくとも自分は今まで両親家族と一緒に生活できたことは幸運だったと認めマラガリータと慰め合う。フェリーペ美公が宮廷に戻りフアナ王女との初対面の儀式を挙げる。その夜結婚式を挙げる前に両人は夫婦関係を始めフアナはフェリーペに惚れこんで行く。フェルナンド王はローマ法皇がフランス寄りの態度を示しフェルナンドの要請を無視していることに腹を立て武力をもってナポリを占領する決意を固める。ローマ法皇がｲｻﾍﾞﾙとフェルナンドにカトリック王の称号を与えるがフェルナンドは満足せずフエンサリーダをフランスに派遣しナポリ王国をフランスとカスチィージャアラゴンで分け法皇を孤立させることを提案する。

**第３１章**

**要約**

フアン王子とマラガリータ大公女の結婚式の準備が始まる。フェリーペ大公はフアナが連れてきたお付きのカスチィージャ家来や付き添いの人達をマラガリータと一緒にカスチィージャに戻させる意向を示す。これに反対のベアトリスデボアデイージャは滞在費はカスチィージャから送るのでフアナ王女を取り巻くカスチィージャの奉公人はそのまま滞在させるように申しでる。マラガリータがセゴビアに到着しカトリック両王や結婚相手のフアン王子に面会する。その後ブルゴスの大聖堂でシスネロス大司教によって結婚式が挙げられる。披露宴の晩餐会でフランデスの貴族達が居酒屋で飲み食いをしているような無礼な態度を見かねてマラガリータ大公女は席を立ちフランデスの恥だとして強く叱り退場させる。フランス王はローマ法皇に脅しをかける為海賊を装ったフランス軍をローマ近くの港があるオスチアに送り城砦を占領させ物資や食料の供給を困難にさせる。法皇はフェルナンド王に使者を送り救助を求め息子のセサールをナポリに送りゴンサーロに会いバチカン皇国の軍事司令官になって欲しいと要請する。ゴンサーロは自分はフェルナンド王に仕える家臣であるのでローマ法皇といえどもフェルナンド王を裏切ることはできないとして丁重に断り事情をフェルナンド王に報告する。王はこの法皇の要請を受けて１０日間だけ援助することを決める。ゴンサーロはオスチア城に向かい如何にすれば城砦を占拠できるか作戦を練り危険を冒して城壁の中に侵入し中から城の門を開け軍隊を突入させ８日間で城砦を占領することに成功しローマ法廷や地元の領主諸侯達を驚かせ感嘆させる。法皇はゴンサーロを何とかして法皇庁の防衛司令官に起用する為年一度だけ与える名誉ある金のバラ賞のトロフィーをゴンサーロに与える儀式を開き是非ローマ法皇に仕えて欲しいと説得するがゴンサーロはフェルナンド王によってローマは助けられたので自分は王の指示に従っているだけだとしてトロフィーを頂き感謝するが軍人としての義務を果たしただけでローマ法皇に仕える意思はないことを表明する。ブルゴスでの結婚式を挙げる為不在中のトレド大司教の代行役をシスネロスの兄が引き受けるが権限を乱用して罪悪人を助けたり不法行為をしこれがカブレラに見つかりシスネロスは兄を強く叱るが逆に暴力を受けて気を失い倒れる。兄はシスネロスから奪った指輪を売り犯行が認められ逮捕される。チャコンがフアン王子とマラガリータの新婚生活が普通ではないことに気が付きフアン王子の健康状態に影響するので一時的に別居させることを勧めるがｲｻﾍﾞﾙ女王もフェルナンド王も夫婦の関係を割くのは神に逆らうことだとして真剣に考えない。タラベラがインデイオが奴隷として取引されていることを突き止め裏でフォンセカが動いていることを知る。ｲｻﾍﾞﾙ王女がポルトガル王と結婚のため国境のバレンシアデアルカンタラまで両親や家族の見送りを受ける。ポルトガルから新郎のマヌエル王が母のベアトリスデブラガンサと一緒に来て対面する。マラガリータ大公女が妊娠したとの知らせが入り両王はお互いに満足する。その後フアン王子の体調を壊しチフスの様な病状になったとの知らせが入りフェルナンド王はこれをｲｻﾍﾞﾙ女王に伝えずに急遽フアン王子が滞在するサラマンカに駆け付ける。フアン王子は重体で亡くなる寸前だったが父フェルナンドと最後お別れを交わす。フェルナンド王はこの知らせは自分で直接ｲｻﾍﾞﾙ女王に伝えるのでそれまで伏せて置くよう命じｲｻﾍﾞﾙが待っているバレンシアデアルカンタラに向かい訃報を伝える。フエンサリーダがフランデスを訪問しフアナ王女と付き添いの奉公人達の滞在費用をフェリーペ大公に渡すが奉公人達は既に病気で亡くなってしまたと聞かされ驚く。実際には病気ではなくフランデスの宮廷が一切何の援助も与えなかったのが原因で起こった不祥事であることが分かりフアンサリーダはカスチィージャに戻らずフアナ王女の安否が心配で王女の近くに滞在する事に決めカトリック両王に書状を送り報告する。

**第３２章**

**新規登場人物**

アナデブレターニャ(1477-1514)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwi3g96b7LHXAhVGUhQKHZ5cDAMQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/fernando-el-catolico/t3&psig=AOvVaw1XGL0fKh2-1meycixkyja3&ust=1510329026469887)

フランスブレターニュ公国公爵でフランス王カルロス８世とルイス１２世の妃として２度フランス女王となる。

ルイス１２世(1462-1515)

[](https://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&ved=0ahUKEwjO9YXU7rHXAhUBoBQKHTBkBVAQjRwIBw&url=https://www.pinterest.com/pin/360288038918695476/&psig=AOvVaw3Fnz8eMyRLfVjE-V9OD7kE&ust=1510329683912126)

ルイスデオーレアンス公でカルロス８世の後1498-1515フランス王となる。

**要約**

イサベル女王は長男フアン王子の死が唯一の息子であり王国の後継者だったこともあり深い悲しみに陥ってしまる。息子の嫁であるマラガリータ大公女こそは無事に出産できることを祈るが又してもの悲惨な事態となり流産してしまう。フランデスに嫁いだフアナ王女に何度か手紙を送るが一度も返事をもらえず心配するが手紙はフェリーペ美公が受け取りフアナには渡されていないことがわかる。グラナダ開城後６年たつがイスラム教徒のキリスト教への改宗は程んど進んで居らずタラベラ大司教のやり方が疑問視されシスネロスの起用が決まる。フランスではカルロス８世の妃アナデブレターニャが４度目の出産をするが死産でいまだに一人も後継者が出来ない。フランデスではフェリーペ美公はカスチィージャ王子フアンが亡くなったのでフアナと自分が後継者になれると考えフエンサリーダにこの趣旨の書状を渡しカトリック両王に伝える。このころフランスではカルロス８世が亡くなり従弟のルイスデオーレアンスがルイス１２世としてフランス王になる。グラナダにシスネロスが着き力ずくでキリスト教を布教しなければいつになってもグラナダはイスラム教支配の社会から抜け出せないとしてイスラム指導者を招集しキリスト教に改宗するように説教する。これに対しカトリック両王の約束ではイスラム教が尊重されることになっていたとして不満を示しシスネロスの話に拒否する指導者が捕らわれ暴力を加えてキリスト教に改宗させると一般住民のキリスト教への改宗者が増え始める。インデイアスより使者が戻りコロンブスが新たに大陸を見つけたとの知らせが入る。またコロンスブの息子が真珠の販売で強盗に襲われけがをする。コロンブスが真珠を持ち帰ったことは秘密になっていたので誰にもこの事実は明かされていなかった。フォンセカによって真珠が没収されコロンブスの息子デイエゴはこの事実を告白する。フェリーペ美公はフランス王ルイス１２世に使者を送りボルゴーニュ公国はフランス王国に属する領土であるとしてフランス王の家来になり支持を受ければカトリック両王もフェリーぺの意向を尊重するだろうと考える。これを知ったフアナはフランスの家来になるなど全く受けられない事でありそのような恥ずかしい行為は許せないとしてフェリーペと大喧嘩する。フエンサリーダはフェリーペ美公よりの手紙をフェルナンド王に渡しフランスの属国としてフランス王の支持を得たことは父親であるマキシミリアーノの許可なしで勝手に決めたことであり息子は恥知らずで信用できない人物だと親のマキシミリアーノからも言われているとして将来カスチィージャにとってフェリーペ美公がフアナを利用してフランスの為に行動するのではと危惧され充分注意しなければならないとカトリック両王は失望する。フランスではルイス１２世が未亡人のアナデブレターニャを妃に迎える為正妻との結婚を無効にする為ローマ法皇に親書を出す。カトリック両王はフアン王子の死で後継者はポルトガル女王になったｲｻﾍﾞﾙとマヌエル１世だとしてカスチィージャに呼びカスチィージャ議会とアラゴン議会での王位継承権の宣誓式を挙げる。フェルナンド王の指示でゴンサーロフェルナンデスがカスチィージャ軍を率いてナポリからフランス軍を追放したが亡命していたナポリ王がナポリの領土を返して欲しいと申し出てきたためゴンサーロフェルナンデスにこれを拒否する様命じる。アラゴン議会は女性であるｲｻﾍﾞﾙ王女の王位継承権を認めないとして宣誓式は拒否されフェルナンド王が直々に説得し交渉することになる。フエンサリーダがフェリーペ美公が妹マラガリータをフランデスに帰す様にとカトリック両王に伝え目的はイングランドのアーサー王子と結婚されることにあるとしてカトリック両王の子女カタリーナとの結婚を妨害すつもりであるとしてまたしてもフェリーペ美公の反カスチィージャ志向にカトリック両王は頭を痛める。フアナが長女レオノールを出産するがフェリーペは男子でないので喜ばない。フェルナンドン王とフランス王の使者が会談しナポリ王国を半分に分け合うことで合意しフェリーペ美公はフランスに無視されたとしてフェルナンド王の抜け目のない外交手腕に改めて留意する。

**第３３章**

**新規登場人物**

フアンマヌエルベルモンテ(1450-1543)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwiD2J77rrzXAhXC0RoKHTaSCVUQjRwIBw&url=http://www.rtve.es/fotogalerias/asi-fue-muerte-isabel-hija-reyes-catolicos/139715/asi-fue-muerte-isabel-hija-reyes-catolicos/4&psig=AOvVaw24njRW9IdkeRFlljGau1rv&ust=1510690519128620)

カトリック両王の外交官としてイングランドやフランデスに派遣されフエンサリーダを代行してフアナ王女の世話役としてフランドルの宮廷で仕えるが後にカトリック両王を裏切りフェリーペ美公のカスチィージャにおける最高顧問の地位に就きフェルナンド王の失脚に貢献した。

**要約**

グラナダではイスラム教徒をキリスト教に改宗させる為の活動がシスネロスによってエネルギッシュに展開されるが強制的な改宗に反発するイスラム教徒による反乱が勃発する気配が高まっていた。シスネロスが病気で倒れ改宗活動が一時止まるがシスㇾロスの力による改宗活動に反発するイスラムの指導者が捕らわれると暴動が起きる。シスネロスは暴動鎮圧を理由にカブレラに軍隊の導入を要請し暴徒との戦いに挑むがタラベラが仲介に入りカトリック両王がイスラム教の自由の保障をすると言って約束し一時的に事態は治まる。その後シスネロスはカトリック両王を説得しイスラム教徒の存在は王国の秩序と平和に害であり如何にしても駆逐すべきと進言し軍隊を送り込みイスラム教徒を弾圧する。イスラム教徒の暴動はその後も繰り返され１７世紀初めまで続く。フランデスではフアナ王女がフェリーペ美公のフランス支持政策に反対で夫婦の関係は悪化する。フエンサリーダに代わってフアナ王女の世話役となったベルモンテがフアナを説得しフランデス宮廷に溶け込むことでフェリーペ美公との関係が改善できると勧める。フェリーペ美公はフアナ王女との関係は一時的に回復しカトリック両王宛ての書状でフランデスの貴族にカスチィージャの大司教職を与えて欲しいとした趣旨の書状にフアナは署名する。フランスではルイス１２世がナポリ王になる為ローマ法皇に圧力を掛け法皇の息子セサルにフランスの公国を与える代わりにイタリア半島の入り口であるミラノ公国にフランス軍が入ることを認めさせる。法皇は同時にカトリック両王に息子セサルにアラゴン王国のガンデイーア公爵に任命する様求めるが拒否される。ｲｻﾍﾞﾙ王女が妊娠しアラゴンで男子を出産するが難産のため王女は亡くなる。長男が亡くなったばかりで悲しみから抜けきれないでいたｲｻﾍﾞﾙ女王に又しても悲劇が来て気を失ってしまう。誕生した子供メゲル王子はカスチィ―ジャで育てることを決めるがポルトガル王は反対する。結局ポルトガル王マヌエル１世とカトリック両王の娘マリアがポルトガル王と結婚することで合意に達する。ｲｻﾍﾞﾙ王女の死がフェリーペ美公に伝わるが子息が誕生したと聞き継承権はまだフアナに回ってこないことを残念がる。フアナはフェリーペと仲良くしている女官を部屋に呼び無理やり髪の毛を切りつける。これを見たフェリーペはフアナは気が狂ったとして離縁してカスチィージャに送り返すと脅かすがフアナが妊娠したことで態度をかえ再び仲直りする。フアナの世話役となったベルモンテはフランデス宮廷で手腕をみとめられフェリーペ美公から信用され頼られる。フエンサリーダはベルモンテの行いに疑問を感じるがまさかカトリック両王に不利になるような行動をとるとは考えてもいなかった。フエンサリーダはイングランドでカトリック両王の子女カタリーナ王女とアーサー王子の結婚の確約を王エンリケ７世より入手しカトリック両王に報告する。フェルナンド王はフランスがローマ法皇の支持を受けナポリを占領しナバーラ王国に介入してカスチィージャに脅威を与える政策を企てることがわかりフランスとの戦争は避けられないとして戦闘準備態勢を引くように命令する。

**第３４章**

**新規登場人物**

マリーアデアラゴン(1482-1517)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjFnLvCgLfXAhUFPxQKHaiCDVIQjRwIBw&url=http://lab.rtve.es/serie-isabel/personajes/personaje/fernando-el-catolico/t3&psig=AOvVaw02rFjzukVZJycGW8A51ae2&ust=1510506274299493)

カトリック両王の４女でポルトガル王マヌエル１世と結婚し３４歳の若さで亡くなるが数多くの子孫を残し次期ポルトガル王フアン３世の母。

**要約**

１５００年２月２４日フランデス宮廷でフアナが長男カルロスを出産する。ゴンサーロフェルナンデスがナポリから戻り今後の戦略についてフェルナンド王と話す。グラナダ近郊の街でイスラム教徒が集合し反乱を起こし他の地域にも広がる懸念が出て来る。シスネロスはフェルナンド王に許可を求め力ずくで暴動を抑制するが手に負えずゴンサーロフェルナンデスを送る。カトリック両王の孫ミゲル王子はカスチィージャアラゴンとポルトガルの３王国の後継者でｲｻﾍﾞﾙ女王が直々に育てるが又しても不運が来て２歳になる前に亡くなってしまう。ｲｻﾍﾞﾙ女王は長男フアンと長女ｲｻﾍﾞﾙが亡くなりフアンの息子も死産でさらにｲｻﾍﾞﾙの息子も亡くなったことで不幸の連続で神はなぜこのような罰を課すのか理解できず苦しみと悲しみに陥る。フランデスではフェリーペ美公がフアナに内緒でフランス王に使者を送り長男カルロスとフランス王の長女クラウデイアとの婚約を提供しフランスの支持を仰ぐ。フランス王はカルロス王子はカトリック両王の孫であるのでこの婚約でカステイージャとの関係が悪化すると懸念する。カトリック両王は後継者ミゲル王子の死でフアナを後継者にせざる負えず配偶者のフェリーペ美公がフアナに代わってカスチィージャ王となればこれまで苦労して築き挙げてきたカトリック王国が台無しになってしまう事を危惧する。フアナとフェリーペをカスチィージャ宮廷に呼び後継者として宣誓式を挙げることになるがフアナが女王でフェリーペは女王の配偶者であり王ではないと明記した条項を入れる。グラナダでは暴動が治まらず事態は悪化する。フェルナンド王はこのままでは取返しが付かない事態になるとして断固とした姿勢を示しイスラム教徒の反乱集団を全滅させる以外に方法ないとして王自身が軍を率いてグラナダに出陣しイスラム反乱集団に攻撃をかけ一掃し女子供だけが生き残りキリスト教に改宗させられる。ポルトガルではマヌエル１世の王権を認めない貴族のブラガンサ公爵がフランス王を訪ねポルトガル王マヌエル１世を倒し自分が王位に就くとしてフランスの支持を求めマヌエル１世がカスチージャ王女マリアと結婚できないようにローマ法皇に勅書を出さないように圧力を掛けて欲しいと申し出る。フランスにとってもカスチィージャ王女とポルトガル王の結婚を阻止できれば都合が良いので法皇に使者を送り勅書発布は見送る様フランス王の意向を伝える。ポルトガルのマヌエル１世は息子の葬式出席のためカスチィージャ宮廷訪問しブラガンサ公がポルトガル王権を略奪する企てをしているので早急にカスチィージャ王女マリアと結婚しカスチィージャが同盟国として支持していることを示すことでブラガンサ公の謀反を抑えたいとカトリック両王に伝えるがローマ法皇よりの勅書が来るまで結婚式は挙げれないとして良い返事を得られずポルトガルに帰る。またマリア王女はマヌエル王に以前マヌエル王がマリアとの婚約を拒否し姉ｲｻﾍﾞﾙと結婚したことについて言及し今になってなぜ自分と結婚する気になったのかと問う。フアナはフェリーペが勝手に息子カルロスをフランス王女と婚約させたことを知りカトリック両王である両親を裏切るようなことで絶対に反対だとして大喧嘩するが結局承諾する。だがカスチィージャ女王の位はフェリーペには譲れないとし絶対に受けないと言い張る。フランデスから使者がカスチィージャに来て孫カルロスがフランス王女と婚約した事を伝えフアナはカスチィージャに来れない理由は妊娠しているので長旅が出来ないからだという。フェルナンド王はフェリーペ美公の行動を妨害する目的でフランス王をグラナダに迎えナポリ王国を分け合う協定を結ぶ。この協定でフランス王がナポリ王となるが王国の半分はカスチィージャの領土となり税収等は半分ずつ分ける事としポルトガルのブラガンサ公は支持しない事を約束させる。またフェリーペ美公とフアナ王女の息子カルロスとフランス王女クラウデイアとの婚約の取り消しを文書で調印させる。この和平協定で両国間の争いは終わりローマ法皇はフランスとカスチィージャに背を向かれたとして危惧し懸案となっていたカスチィージャが求めていたポルトガル王との結婚勅書を発布する。フランデスではフェルナンド王とフランス王が和平協定を結びフェリーペ美公は完全に無視さたことに気が付き落胆する。早い機会にカスチィージャに行き直接カトリック両王と交渉する必要ありとし旅程をたてる。ポルトガルではマヌエル１世とマリア王女が結婚式を挙げ式にはブラガンサ公も出席し王に服従する態度を示す。グラナダでは多数のイスラム教徒がキリスト教に改宗し洗礼式が催される。

**第３５章**

**新規登場人物**

カタリーナデアラゴン(1485-1536)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&ved=0ahUKEwijjJ-M_LjXAhXJuRoKHafgBL8QjRwIBw&url=http://www.dailymotion.com/video/x2g92mm&psig=AOvVaw1WZeQN14war_5pzl_uR7dd&ust=1510573748275053)

カトリック両王の末娘でイングランド王子アーサーと結婚するが王子が急死し次男ヘンリー８世と再婚しイングランド女王になる。娘マリアはチューダーマリー女王として有名。

**要約**

フェリーペ美公はカスチィージャ訪問の旅費として１０万マラベリをカトリック両王に要求する。フランス王はフェリーペとフアナがフランスを通過してカスチィージャに旅することを提供しフェリーペとフアナに個人的に会いたい意向を表明する。フアナは反対するがベルモンテが説得し承諾する。コロンブスはｲｻﾍﾞﾙ女王が派遣した判事フランシスコボアデイージャによって統治下で不正行為や犯罪を犯したとして逮捕され鎖につながれ船倉に監禁された形でカデイスに戻ったとの報告を受けたｲｻﾍﾞﾙ女王は直ちに鎖を外し身分相応の衣類を与えた上で宮廷に出向くように命ずる。フアナ王女が女子を出産する。フランスより使者がきてナポリ王ファドリケがトルコ軍に援助を求め王国の防備を始めたので早い機会にフランスとカスチィージャでナポリを分配すべきだと申し出る。カトリック両王の末娘カタリーナがイングランド王子と結婚のため両親と別れる時期が迫りｲｻﾍﾞﾙ女王はこれでもう一人も子息が身近にいなくなるので寂しいとしてカタリーナの出発を遅らせたいと願ってした。タラベラ大司教がシスネロスに戦争資金を集める目的で設けられた税金アルカバーラの撤廃を提案するとシスネロスも一応同意だがカトリック両王に提案することを勧める。コロンブスと家族がｲｻﾍﾞﾙ女王に謁見し新大陸でのコロンブルの行いは決して許されないとして以前与えたタイトルや財産その他の報酬は没収するが宮廷外で自由に生活する事は許すとしてコロンブスの言い訳は聞かずに女王は立ち去る。コロンブスの息子と兄は裁判所経由で王家を訴えることを決める。最終的にｲｻﾍﾞﾙ女王はコロンブスの財産や報酬については認めるが新大陸の副王や海軍司令官のタイトルは取り上げると伝える。イングランド王は財政困難解決の為また王の反対勢力に対抗する必要に迫られカスチージャ王女と息子アーサー王子の結婚で得ることのできる持参金を期待しカスチィージャとの親類関係が結ばれれば反対勢力もカスチィージャを敵にまわす訳にはいかないので王は尊重されるとしてカタリーナが早い機会にイングランドを訪れることを希望していた。フェルナンド王もフェリーペ美公が妹マラガリータをイングランド王子と婚約させカスチィージャとイングランドが親類関係になるのを避ける企てをしていたので早い機会にカタリーナをイングランドに送り結婚させた方が得策だとしてｲｻﾍﾞﾙ女王を説得し慰める。カスチィージャ大使フエンサリーダとフランス寵臣がローマ法皇を訪ねナポリ王ファドリケを退ける様要請し法皇はこれを受ける。カトリック両王はフアナがフェリーペと一緒にフランス王国内を通ってカスチィージャに旅することを知り大反対する。ナポリ王国の分割でフランスとカスチィージャはどこを境に決めるかで合意できず両軍の間で争いが起こり始め戦争が勃発する可能性があったのでフランス王国内にフアナ王女が滞在することは極めて危険だとして心配された。フェルナンド王は最悪の事態を想定しフエンサリーダをフランデスに送り孫のカルロスを保護しカスチィージャに連れて来るように命じる。フェリーペ美公とフアナ王女はフランス王に謁見するがフェリーペ美公がフランス王の属国ブルゴーニュ公国の公爵として頭を下げ御辞儀するがフアナはフランス王の家来ではなくカスチィージャ王の後継者であるとしてフランス王にお辞儀をしない。フェリーペは謁見式のあとフアナの振舞いを強く叱るがフアナは逆にフェリーペの振舞いはカスチィージャ女王の配偶者として屈辱的で不名誉だとして批判し喧嘩となる。フランス女王アナデブレターニャの招きでミサに出席したフアナはここでも自分はフランス女王の家臣ではないのでフランスの伝統にしたがって女王がお布施に使う金貨を家臣に与える儀式でこれを拒否し自分のイアリングを外してお布施代わりにする。フランス王はフェルナンド王に圧力を掛けフランスの要求を受けらせる為フアナ王女を人質にすることを考えるがフアナ王女とフェリーペ美公が無事にフランスを通過できるとした約束を破ることになりフランス王の名誉と信用が失われまたカスチィージャや神聖ローマ帝国に戦争を挑発することになるので断念する。フェリーペ美公フアナ王女は長旅を終えピレネー山脈を越えバスコニアのフエンテラビーアに着くがｲｻﾍﾞﾙ女王は迎えに現れず家臣のカブレラが少人数の兵隊を連れ出迎える。フアナは期待外れの出迎えにがっかりする。宿泊施設のない小さな部落にある農家に泊ることになるがフェリーペが足にけがをして痛みが止まらず医者を探すが見つからず部落に住む呪医が薬草で治療すると痛みが取れる。フェリーペは部落を出発する前に呪医に会い痛み治してくれたことを感謝し褒美に宮廷で医師として迎えたいが他に何か希望があれば何でも与えるので希望を言わせると呪医はここから早く出て行って欲しいと言いこれを聞いたフェリーペは憤慨しフアナ王女もなんて無礼で不親切な態度だとして不満を漏らしカスチィージャの出迎のひどさに絶望する。カブレラはｲｻﾍﾞﾙ女王が出迎えに来れない理由は病気だと言うがフエンサリーダが問いただすと実はフェリーペの思い上がりを止めわざわざ不自由な旅を経験させるのが目的だと説明する。セゴビア宮廷でカトリック両王がフェリーペとフアナの歓迎式を挙げる。フェリーペにフランデスから知らせが届き妹マラガリータが父マキシミリアーノの取次ぎでサボヤ公と結婚することになったと伝えこれはマキシミリアーノがフェルナンド王の依頼を受けて決めた婚約でフェリーペのイングランド王子との婚約プランは不可能となる。フェリーペは改めてフェルナンド王の行動力と賢い外交手腕を認め今後の動に充分考慮しなけらばならないと考える。

**第３６章**

**新規登場人物**

ヘンリー７世(1457-1509)

[](https://laplateacritica.files.wordpress.com/2014/11/10730813_758464104234089_4750587716972435926_n.jpg)

ヘンリー８世の父でチューダー王朝の創始者。ヨーク家の王リチャード３世を倒し王の座を奪った為王家の血筋でない為王家支持派の反発を受けた。

ヘンリー８世(1491-1547)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjy_YmarbzXAhVGPRoKHcAhC0QQjRwIBw&url=http://www.rtve.es/television/isabel-la-catolica/capitulo-36/&psig=AOvVaw1K3n0n_pBe-eCSeO7k-_VA&ust=1510690065667305)

イングランドで最も有名な王として知られている。兄のアーサー王子が亡くなった後スペインのカタリーナ王女と結婚する。ローマンカトリック教会から独立し英国教会の創設者。

ブスレイデン(1455-1502)

[](http://www.google.es/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwiD2J77rrzXAhXC0RoKHTaSCVUQjRwIBw&url=http://www.rtve.es/fotogalerias/asi-fue-muerte-isabel-hija-reyes-catolicos/139715/asi-fue-muerte-isabel-hija-reyes-catolicos/4&psig=AOvVaw24njRW9IdkeRFlljGau1rv&ust=1510690519128620)

フランデスでフェリーペ美公の家庭教師を務め後に最も信頼された顧問として寵臣的存在となる。聖職者で政治家。

**場所**

トレド



スペイン最大級の大聖堂がありカトリック教会大司教区の首都。キリスト教徒ユダヤ教徒イスラム教徒が長年共存した古都。

**要約**

フアナ王女とフェリーペ美公がトレドの大聖堂でカスチィージャ王の後継者に任命される宣誓式がデイエゴパチェーコの主宰で行われる。大聖堂近くでフランデスから来た護衛兵とカスチィージャの兵士が争いを起こしフランデスの兵士が切られて死亡する事件が起きカトリック両王にフェリーペ美公の寵臣ブスレイデンが苦情を出す。イングランドではカタリーナ王女と結婚したアーサー王子が急死し事実上夫婦の関係がないままでカタリーナ王女は未亡人となってしまい将来が危ぶまれる。トレドではフアナとフェリーペが後継者として宣誓されたがカトリック両王はフアナが王政を賄えるかどうか不安でフランス支持のフェリーペによってカスチィージャは滅ぼされてしまう可能性ありとして頭を痛める。いかにしてフアナに女王としての役目を教えフェリーペに騙されないようにするか思案し取りあえずはフェリーペの寵臣のブスレイデンを使ってフェリーペに助言をするようベルモンテに言い渡す。またフランデスに戻る時期を遅らせカスチィージャに長期滞在することを勧めるがフェリーペは言うことを聞かずアラゴンでの宣誓式のあとフランスを経由してフランデスに戻る意向を示す。フアナが妊娠していたので出産するまでカスチィージャに滞在する様説得しても聞かない。ナポリから知らせが入りフランス軍との衝突が避けられない状態になっていることが明らかになるがフェルナンド王はこれについてフェリーペには伝えない。フェリーぺが信用できない事の再確認の為如何にしたらフランスとの紛争を解決できるかを問い合わせるとフェリーペは自分はフランス王と良い関係にあるので交渉すればカスチィージャに有利な結果を得れると自負する。フェルナンド王は既にアラゴン海軍がナポリに向かって出航したので交渉の余地なしと嘘をつく。案の定フェリーペはこのニュースをフランス王に伝える。ナポリから連絡が入りフランスがナポリ防衛の為に兵力を増強し守備を固めたとの知らせが入る。フェルナンド王が仕掛けた罠にフェリーペはかかりフェリーペのフランス支持が明らかになるが実際にはアラゴン海軍はナポリに来ないのでフランス王に無駄な動きをさせたとして信用を失うことになる。イングランドでは王エンリケ７世はカタリーナ王女とアーサー王子の結婚で受け取たカスチィージャからの持参金を返すことはできないとして息子との結婚が無効となった以上代わりに自分がカタリーナ王女と結婚したいとカトリック両王に伝えて来る。ｲｻﾍﾞﾙ女王はこれに対して大反対しカタリーナ王女が直ちにイングランドからカスチィージャに帰る様に命ずる。フエンサリーダがエンリケ王と会いカトリック両王はこの結婚は受けないことを伝える。カタリーナ王女と付き添いの家来たちの生活は日に日に厳しくなり食糧も不足し暖炉用の焚き木も底をつくがエンリケ王は滞在費は王家として出せないとして無関心を示す。カタリーナ王女は母からもらった宝石類を売り食糧費にあてる。エンリケ王子がカタリーナ王女を訪問するようになりカタリーナ王女が最低限の生活もできない環境で飢えと寒さに苦しんでいるのを見て少しずつ援助をするようになる。トレドではベルモンテがカトリック両王を裏切りフェリーペ美公に助言を与えるようになる。ブスレイデンを通じてカトリック両王の信用を勝ち得ることが得策なので本心は現さず従順な態度で振舞うことを助言する。ｲｻﾍﾞﾙ女王はフェリーペ美公はブスレイデンの言うことは何で聞き全てブスレイデンに依存しているのでフェリーペを直接説得するよりもブスレイデンを味方にした方が良いと考えコリア大司教区をブスレイデンに与える。案の定ブルレイデンはフェリーペにカスチィージャに残ることが得策だとして説得しカスチィージャを統治するにはフランデスからは無理だと説明する。シスネロスはｲｻﾍﾞﾙ女王が勝手にコリア大司教区を外人であるブルレイデンに与えたことに批判し憤慨する。ｲｻﾍﾞﾙ女王は体調を崩し重病になり倒れてしまう。フェルナンド王はフアナとフェリーペを連れアラゴン議会で宣誓式を行う為アラゴンに滞在するがｲｻﾍﾞﾙ女王が病気で倒れたことが知らされ議会に出席せずカスチィージャに戻る。カスチィージャ宮廷では家臣達が祈りを捧げる中ｲｻﾍﾞﾙ女王の死が近い雰囲気になりフェルナンド王は絶望し悲しみに陥るがその後ｲｻﾍﾞﾙ女王は回復に向かい元気になる。フェリーペ美公にフアナをカスチィージャに残してフランデスに戻ることをフアナに相談しないで決めるがフアナはこれを知って気が狂ったように反対しフェリーペとカトリック両王も驚嘆困惑する。フアナは母ｲｻﾍﾞﾙに対して罵る様に怒り一切話も聞かずに泣き叫んで気が狂ったように振舞う。フエンサリーダがイングランドより戻りカタリーナ王女をエンリケ王子の結婚を提案する。王子はまだ１１歳でカタリーナより６歳下でまだ結婚適齢期ではないが５年後結婚すればカタリーナがイングランド女王になれるとして他に解決策がないので正式に申しでることに決める。ナポリではセミナラがフランス軍によって占領される。フェリーペ美公をカトリック両王大使としてフランス王と交渉させることを決めフェリーペはフランスに向けて出発する。しかしながらフェルナンド王はフェリーペがフランスに有利な条件で話を進めることが推測できたので至急ナポリのゴンサーロに使者を送りフェリーペ美公からの命令は一切服従しないようにと命ずる。ブスレイデンがトレドで亡くなりベルモンテがフェリーペの右腕として仕えるようになる。

**第３７章**

**場所**

モタ城



メデイーナデカンポにある城で１４世紀１５世紀に建てられた。１６世紀には刑務所として使われローマ法皇の息子セサール公やその他有名な人物が収容された。

**要約**

フェリーペ美公がカスチィージャを去りフアナは一人で部屋から出ず食事もとらない日々を過ごす。ベアトリスが世話するが言う事聞かず逆にベアトリスを脅迫しフランスに行ってフェリーペの行動を調査するように命じる。フアナ王女の振舞いがあまりにも平常でなくお付きの家来も虐待されていることがｲｻﾍﾞﾙ女王に知らされる。ｲｻﾍﾞﾙ女王はフアナに会い話をするがフェリーぺが居ないと生きていけないのでフランデスに帰りたいと言い理性が失われたことがわかる。女王は自分がフアナをフェリーペと結婚させたのでこのようなことになったのは自分の責任だとして罪を感じる。フランスではフェリーペ美公がカトリック両王の代理でフランス王と会議を始める。ナポリ問題の解決策としてフランス王の娘とフェリーペの長男カルロスを結婚させ両人にナポリ王国を与えることを提案しフエンサリーダの抗議を無視して合意書に調印する。フランス王はこれでフランスの家来であるフェリーペ美公がカスチィージャとアラゴンの王になれば将来カスチィージャとアラゴンがフランス王国の属国になるとして満足する。フアナがアルカラで次男フェルナンド王子を出産するが本人は無関心でｲｻﾍﾞﾙ女王は困惑する。フエンサリーダがカスチィージャに戻りフェルナンド王にフランスとの間で交わした屈辱的な合意書を渡すがフェルナンド王はこの合意書はフェルナンド王の署名がないので無効だと伝えフェリーペ美公には調印する権限は与えて居らず交渉だけするように命じたと明かし既にナポリではアラゴン軍がフランスを締め出す為に戦闘を開始したと言う。この調印でフェリーペ美公がフランスの家来として行動しカスチィージャとアラゴンの為に不利になるようなことばかりを企てるのでフアナ王女だけが後継者でフェリーペ美公には王政は任せないことを決める。フェルナンド王はフアナ王女が女王としての任務をこなせるか確かめる為王国の首脳会議に出席させ王国が直面している問題について意見を求めるとフェリーペに会いたいのでフランデスに帰りたいと返事があり王は絶望しフアナがフランデスに行けないように閉じ込める。ｲｻﾍﾞﾙ女王はフアナを説得しようと試みるが全く相手にされず逆効果となる。フエンサリーダがフランス王を訪問しフェリーペとの間で交わした合意書はフェルナンド王の署名がないので無効であると伝え両国の戦争は継続されることになる。ｲｻﾍﾞﾙ女王は病気で寝込んでしまいこの際フアナをフランデスに行かせることを考える。ゴンサーロフェルナンデスの率いるアラゴン軍がフランス軍を破りフランスはナポリから撤退し始める。これに対しフランス王は寵臣が休戦協定を結ぶ事を勧めるが王は受けず逆にアラゴンの領土であるロセジョンを攻めることを決める。フエンサリーダはその後フランデスに行きフェリーペ美公に会いフェルナンド王もフランス王もフェリーペ美公に裏切られたとしてフェリーペは信用されなくなったことを伝える。ロセジョンがフランスによって攻撃されたことを知ったフェルナンド王はフランス軍を追い出す為に王自ら出陣する決意し病気のｲｻﾍﾞﾙ女王とフアナ王女を別居させることを命じフアナをメデイーナのモタ城に連れて行くことにする。フアナにはフランデスに向かう途中で天候が良くなるまでモタ城で待機すると説明しこの間シスネロスがフアナの世話人としてフアナの精神状態を正常にする任務が任せられる。フランス王とフェルナンド王に見放されフアナもカスチィージャに滞在することが強制されたことを知りフェリーペ美公は一人ではどうにもならないのでフアナ王女をフランデスに戻しカスチィージャとアラゴンの後継者である地位を利用する以外に方法がないとして息子カルロスの名前でフアナに手紙を書き早くフランデスに戻るように要請する。ｲｻﾍﾞﾙ女王はフランスとの戦争に終止符を打つためにローマ法皇の仲介を要請するがローマ法皇アレハンドロ６世は急死してしまう。息子カルロスから入手した手紙を読んだフアナはモタ城を出てフランデスに出発を決意し夜中パジャマのまま城を抜け出そうとするが出口は鍵で閉められ外に出らない。監視兵が部屋に戻る様にと説得するが言う事を聞かず寒さなど気にしないで夜を過ごしモタ城は自分を収容する監獄だとして両親を憎む。ｲｻﾍﾞﾙ女王は病身で休養が必要だったがセゴビアからメデイーナを訪れモタ城の外の警備小屋でフアナに会いフランデスに戻ることを許し父フェルナンドがロセジョンから帰るまで出発を待つ様に伝える。フェルナンド王はロセジョンでフランス軍を全滅させフランス領土に攻め込みフランス王はロセジョンでの敗北を認め休戦協定に合意する。フェルナンド王がカスチィージャに戻り命をかけて戦いナポリやロセジョンを取り返すことが出来たがこれが将来裏切り者であるフェリーペと精神異常の娘フアナによって台無しにされてしまうのが残念だと呟く。フランスとの休戦協定合意のためフエンサリーダがフランス王を訪ねるとナポリ戦争についてはまだ決着がついていないとして休戦協定は調印しないと表明し戦争が継続することになる。フェルナンド王とｲｻﾍﾞﾙ女王はフアナがラㇾド港に向けて出発するのを見送るがフランデスに着けばフェリーペによって人形の様に操られフェリーペの言いなりとなってしまうことを痛感する。

**第３８章**

**要約**

イングランド王ヘンリー７世はポルトガルの修道院で修道女となったフアナラベルトラネッハと結婚する意向を示す。カトリック両王にとってフアナラベルトラネッハがイングランド王と結婚すればカスチィージャの王位を要求してくることになるので誰がこのような知恵を与えたのか考え一番可能性あるとみられるパチェーコ公をカブレラが訪問し問いただすがパチェーコではないことがわかる。パチェーコはｲｻﾍﾞﾙ女王が亡くなり後フアナ王女とフェリーペ美公に代わってフェルナンド王が王政を賄うことに反発する態度を示したとフェルナンド王に伝える。フェリーペがフアナのフランデス到着に備えて妹のマラガリータにフアナの精神状態をやわらげ静めるように頼む。ローマから故ローマ法皇の息子セサールが新任の法皇によって逮捕されたとの知らせが入りフェルナンド王は喜ぶ。カトリック両王はフアナがカスチィージャに戻り女王になりフェリーペは単なる女王の配偶者にさせ孫のカルロス王子が成人になったらカルロスを王にすることを決める。ナポリから便りが来てゴンサーロフェルナンデスがフランス軍を破りフランスが大敗をしたことが明らかになる。フランス王はナポリ戦で敗れ撤退した指揮官を死刑にする。フェリーペ美公はベルモンテをイングランドに送りヘンリー７世とフアナラベルトラネッハの婚約についてカスチィージャとフランデス側の考えを伝えフアナとの結婚でイングランドは孤立しカスチィージャと神聖ローマ帝国を敵にまわすことになるとして考え直す様に説得する。フランデス宮廷に戻ったフアナ王女はフェリーペの側近の女官がフェリーぺと関係を持っていると想像し事実を明かす為に大騒ぎをしこれを止めようとしたマラガリータを殴りつけてしまう。これを見たフェリーペはフアナを部屋に閉じ込めてしまう。カスチージャではアラゴン軍がフランス軍を破ったことでピサ、フロレンシア、シエナ、べネシアなどがアラゴン側に付きイタリア半島はアラゴンの影響力が決定的なものとなる。フランス王はそれでも戦いを辞めないと言い張り戦場での実情を把握せずこのままではさらに多くの死傷者が出るので休戦協定を結ぶように重臣達は申しでる。フェルナンド王はゴンサーロに使者を送りフランス王は休戦を宣言していないがフランス軍は敗戦を認め撤退しているので戦闘はやめる様に指示する。フェルナンド王は孫のカルロスをカスチィージャに連れて来るように命ずるがフェリーペはカルロス王子を妹マラガリータに預け宮廷から離れたマリーナスという場所に移し母であるフアンと離しカスチィージャにも行けないようにする。フェリーペはベルモンテに相談し如何にしたらカスチィージャ貴族をフェリーペ支持派にしフェルナンド王に反抗させることが出来るか尋ねる。ベルモンテはカスチィージャ貴族の大半はカトリック両王によって特権や領土を没収され服従させられたのでｲｻﾍﾞﾙ女王が生きている間は服従するがフェルナンド王が王位に就けば貴族の謀反が起こる可能性ありと説明する。フェリーペはベルモンテをカスチィージャに送り貴族に対しフェリーペ美公は失われていた特権や領土を返すことを約束すると伝えフェルナンド王に対抗して王位に就くことを企む。フランスより王の使者がカスチィージャに着きフランスに不利な和平条約が結ばれる。同時に捕らわれの身となった故ロ―マ法皇の親フランス派の息子セサールがフェルナンド王の前に突き出され長い期間カスチィージャの刑務所に入ることになる。ｲｻﾍﾞﾙ女王が再び倒れ重体で寝込んでしまう。女王はもう回復する見込みはないと感じ死が迫ったことをフェルナンド王に伝える。デイエゴパチェーコ公が病気のｲｻﾍﾞﾙ女王を訪ね自分の親戚の修道院長がシスネロスによって解雇されたとして抗議する。これは罪のない修道女が投獄されたので救って欲しいとの要請を受けたｲｻﾍﾞﾙ女王がシスネロスを修道院に送り事実を究明した結果修道女は何も罪を犯してはいないが院長が修道院内に知り合いの男を連れ込んでいることを見たので秘密が漏れないように修道女を監禁したことがわかる。シスネロスは直ちに院長を解雇したがパチェーコが抗議したのでｲｻﾍﾞﾙ女王は貴族との関係を悪化することは避けたいとして院長の解雇は取り消す様に命ずる。シスネロスは女王の命令で修道院で事実を究明し院長を解雇したので今更解雇を無効にすることはできないと反論するがｲｻﾍﾞﾙ女王の立場を考え従うことになる。本来の女王であればこのような貴族の抗議には一歩も譲らないが病気やフアナやカタリーナの問題で気が弱っていた為に弱気の姿勢を見せたとシスネロスは感じる。

**第３９章**

**要約**

イサベル女王は死を前に遺書を準備する。フランデスからベルモンテが戻りカトリック両王に最後まで服従しなかったビジェナ候パチェーコを訪ねｲｻﾍﾞﾙ女王が亡くなった後の問題についてフェリーペ美公の考えを伝えカスチィージャ貴族の反応を打診する。パチェーコはカスチィージャでは外人のフェリーペが王になる事は認めないがフアナ女王を支える形で王権に参加する以外にないと言う。フアナが王政を賄う能力がないと判断された場合はフェルアンド王が代行することになると推測する。従ってフアナを女王の座に就かせるには早い機会にフアナの精神状態を回復させる必要ありフェリーペ美公に連絡する。フランデスではフアナ王女は部屋にこもり食事もとらず体は衰弱し病人の様になりフェリーペは心配して無理やり食べ物を口に入れさせるが反抗して受け入れない。ｲｻﾍﾞﾙ女王は寝床にカブレラとベアトリスを呼び長年にわたって世話してもらったお礼として侯爵の称号を与える。フェルナンド王は重臣達にｲｻﾍﾞﾙ女王の後継者にポルトガル女王での３女のマリアにすることでフアナとフェリーペの王位継承権を無効にさせれば問題が解決できると提案するがこれでは神聖ローマ皇帝を敵にまわすことになりフェリーペがフランスを巻き込んでフランスとの戦争にもなりかねないとして反対する。コロンブスがｲｻﾍﾞﾙ女王に会見を求めるがフォンセカが女王は危篤でコロンブスのいつもながらの要求や不満を聞けるような状態でないとして面会を拒否するがコロンブスはただ別れの挨拶だけをしたいのだと言う。これを知ったタラベラがｲｻﾍﾞﾙ女王に直接コロンブスが会いに来たことを伝え女王は会いたいと言う。ｲｻﾍﾞﾙ女王はフェルナンドに自分の遺体はグラナダに埋葬する様頼みフェルナンドも同じ場所に来て欲しいと言う。女王は貴族との関係が悪化させない目的でカトリック両王以前に与えられていた特権や領地を一部返還することを決める。ビジェーナ候パチェーコにもこれを伝えるがビジェーナ候の領地は歴代王家に属したのでこれは王家が維持すると伝えるとパチェーコは不平を漏らす。ｲｻﾍﾞﾙ女王は王家に謀反を起こし反乱軍として王家と戦い敗れたので本来パチェーコは死刑になっていたはずなのにｲｻﾍﾞﾙ女王の情けで許しビジェナ侯爵として数多くの領地の主として生きることを認めたことを忘れてはならないと伝えるがパチェーコは納得しないで去る。カブレラがパチェーコとベルモンテの会話を耳にしてベルモンテがフェリーペ美公のスパイとして動いている様だと疑いベルモンテの後をつけるとパチェーコにフェリーペ美公がカスチィージャの貴族を組織しフェルナンド王に対抗させる企てをしていることが明らかになる。フェルナンド王は直ちにベルモンテを捕らえる様に命ずるがパチェーコがこれを前もって知らせベルモンテはパチェーコの城砦に保護される。フアナ王女は回復に向かいフエンサリーダをカスチィージャに送り母ｲｻﾍﾞﾙ女王に伝言を渡す。フェリーペ美公はベルモンテからの知らせでカスチィージャ貴族の大半がフアナが女王に宣誓されることを条件にフェリーペを歓迎することを伝える。フェリーペはフアナの精神異常が公になればカスチィージャ議会はフアナに代わってフェルナンド王が王政の摂生になるのでフアナを何として正常な状態に戻す必要があり態度を変えてフアナに親切に近寄り仲直りをする。フアナは程んど回復しフェリーペは喜び生涯一緒に過ごすことを約束し自分がもし亡くなったら財産や称号はフアナに与えると言った書状を見せフアナも同じようにカスチィージャの王権はフェリーペに与える様迫るとフアナは断固でしてこれを拒否する。フェルナンド王はフェリーペ美公がフアナの日常の異常な生活態度を細かく書いた日記を読みフアナに女王として王政を任せることが出来ないと判断し危篤のｲｻﾍﾞﾙ女王にフアナは女王として王政を与えることが出来ないと説明し遺書にフェリーペ美公がカスチィージャ王国の統治はできない旨の語句を入れフアナに代わってフェルナンド王が摂生となる事を書き入れる。１５０４年１１月２６日ｲｻﾍﾞﾙ女王はメデイーナデカンポで亡くなる。ｲｻﾍﾞﾙ女王に忠実だった家臣たちは悲しみに陥る。フェルナンド王はトロでカスチィージャ女王フアナを宣言し王冠を返す儀式を挙げる。